

古代語から近代語へ

国語「史」とか、言語の「史的」研究とか、「歴史」の名を冒した学乃至学の部門が言語の領域に於いても存在するが、しかしそれ等が、はたして厳密な意味でその名称に値するものであるか、つまり言語を歴史的现象として認めることが出来るかどうかと云う根本的な問題、更にはそこから派生する手つづき上の諸々の疑問、たとえば国語史に於ける時代区分の理論的根拠、つまりこの場合にも一般政治史や文化史に於けると同じ手つづき同じ立場に立つべきか否か、などについて、従来歴史学者は勿論、言語の学に携わる者の側からも、真正面からこれと取組もうとする試みはあまりなされなかつたと云つてよい。歴史学者は言語を知らず、言語学者は歴史の理論に疎いことが、それほど責めらるべきでないとするれば、この様な双方の領域に足をつっこんだ問題は、どちらの側からも一応責任を回避してそつとして置くのが、云わばさわらぬ神に祟りなしたたのである。

しかしそうは云うものの、この様な重大な根本問題を、いつまでも頼かぶりですませるわけのものでもないことは明らかであり、事実最近国語史に携わる者の間で、もう少しこの問題を掘り下けてみたいと云う気運が動いて来たのではないかと思う。たとえはさきごろの大野晋氏の「国語史をどのやうに把へるか」と云う論文なども、やはりその様な気運の一つのあらわれと見てよい。ところでこの様な、幾つかの学問の部門にまたがった問題を考へる場合に我々の採るべき態度は、必ずしも一つとは限らないであらうが、学問のよき意味でのセクショナリズムをまもる上から云つても、又我々の限られた能力、時間の範囲で行う為にも、勿論歴史学者の所論を出来る限り参照し、その意見に耳を傾けることは必要であるにしても、それよりも大切なことは、やはり我々の頭で、

而も我々の学問の対象である言語に即して、我々なりの「歴史」観を打ち樹てようとする気がまえてはいないかと思ふ。

ここに特集された数個の論考は、あらかじめ雑誌特集の含みを以て企てられた、今春京都に於ける研究発表会での発表を骨子として書き下されたものばかりである。国語史の流れを一線で劃し、古代と近代とにわけることがはたして妥当であるか、と云う課題そのものに対する疑いもあろう。その様な疑いをも含めて、上に述べた諸問題を、それ／＼の特殊な事実に即して解決することを意図したものはあるけれども、勿論一足とびにすべての根本問題がばた／＼と片づくとは思えない。しかし道はすべてそこに通じている筈である。又そうあることが企劃者としての念願であつたのである。

浜 田 敦